



# のぞみ 希望



## 教育における「不易」と「流行」

校長 若色 昌孝

学校教育においては、繰り返し言われてきた「不易」と「流行」。「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず。」…これは松尾芭蕉の残した言葉とされています。

先に「流行」から。これは、単なる流行（はやり）ものという意味ではなく、「時代の変化とともに変えていく必要があるもの」を意味します。今、子どもたちが真剣に取り組んでいるタブレット（iPad）を使った学習がまさにそれです。子どもたちの興味を引き出すために、本校職員も熱心にもその活用法を検討し、学習に生かそうとしています。本校ではまず、GIGA スクール構想の第一義的な、「子どもと子どもがつながり合い、深い思考が生まれる学習」「同じ時間を共有し、全員参加型の学習」「聞く学習、見る学習から、考える学習へ」を目指して、課題解決の過程でタブレットを使おうとしています。すでに教室では、毎日のようにオンラインで自分の考えをクラスのみんなに表明したり、多数の友達の考えを画面上で確認したりする授業が行われています。ツールとしてのタブレットが、子どもの学びの方法を広めています。この教育的手法をとること、これがまさに今の「流行」です。

では、「不易」。不易とは、「時代を超えても変わらないもの」です。タブレットを使う現代における「不易」とは何でしょう。学校教育における「不易」とは、人と人が生で向き合いながら学びをすすめることだと考えます。あるクラスでの算数の授業。ある数を10倍すると桁が一つ増え、数の右に0が一つ付くということを学んでいました。タブレットを使い、大型テレビで映し出すこともできますが、整然とした黒板で、教師はチョークで数字を書きながら、同時に目では子どもを追い、その理解の反応を見逃すことなく授業をすすめていました。また、あるクラスの国語の授業をのぞくと…子どもがいませんでした。正確に言うと、いないのではなく机の下に隠れていたのです。海の生き物が身を守るためにどうやって身を隠すのかということが教科書に書いてあり、教師は「どこかな、どこかなあ？」と言いながら机間を歩いています。子どもたちはもっと小さくなってその身を机の下に隠そうとします。そうやって、教材文にある海の生き物の気持ちに迫っていたのです。私は、「ああ、大切なことだなあ…」とその授業実践を感心して見ていました。これらのことは、本校で毎日のように行われている「不易」のほんの一場面です。



タブレットを使う授業、五感をフルに使う授業…。子どもにとってよりよい学びが生まれるよう、杉田小学校は、そのどちらの授業もすすめていきます。